

---

# うたた寝

←

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うたた寝

### 【著者名】

ZZマーク

ZZ566T

### 【あらすじ】

息子と一人うたた寝をしていたはずの俺。ふと目を覚ますと、隣で寝ているのは俺の身体だった。さあ、これは夢か現実か?幼かつた頃の視点を少しだけ思い出してみませんか?

(……く、苦しい)

腹を覆つ温もりはとても心地よいのに、そのずつしりとした重さがその心地よさに浸らせてくれない。

朦朧とする意識の中、眉を潜め、胸に圧し掛かるものを押し退ける努力をしたが、思うようにいかないので、渋々惰眠に縋りつくるを止め、億劫だがゆるゆると瞼を持ち上げる。

視界に映る見慣れた天井に、リビングで転寝うたたねをしてしまったのだとぼんやり思い出した。

先に寝てしまった息子は自分の隣に転がしたはずだが、そこに気配はない。親の顔面に裏拳を入れたり180度回転等を平氣でこなす素晴らしい寝相を發揮したようだ……と腹に乗る重たい温もりの元に視線を転じ、目が点になった。

本当に文字通り驚愕、というよりも、目が点。

重みのある温もりの正体は、息子ではなく大きな手だった。

恐る恐る手から腕を辺り、その身体の持ち主を確認する。

(俺? !)

健やかな寝息をたてる俺が、そこに転がっていた。

驚きのあまり飛び起きかけるが俺の手に阻まれ、何となく屈辱的な気持ちを抱えつつ渾身の力でずるずると腕の下から這い出て、改めて暢気に寝ている俺の身体を見下ろし、ふと自分の手を見た。見覚えのある小さな手。

息子の、だ。

指は短く、どこで遊んだのか擦り傷だらけで、昨夜風呂で洗つてやつたら石鹼が染みると怒つていた。

グーチョキパーとやると小さな指が可愛く動く。

(……のど、渴いたな)

あまりに現実離れしていると、パニックになるどころか、逆に頭が冷えるものらしい。

ふらりと立ち上がり、キッチンで水を飲もうと食器棚の前に立つが、無論正攻法では棚の扉に指を掛けることすら出来ない。ダイニングテーブルまで戻り椅子を……持ち上げられない。仕方なく引き摺ろうとしたが、床に傷が付くと息子を叱る口の姿が脳裏に浮かんでしまったので、やめた。

(たしか、洗面所に顔洗い用の踏み台があつたはずだ)

パタパタと軽快な足音を立てて洗面台に着いたところで既に面倒になり、こここの水でもいいや、と妥協してしまつのは、俺本来の性格か、子どもの脳みそだからか。

とにかく、息子のうがい用のコップに水を満たして一息に喉を鳴らして飲み干すと、やつと人心地ついた気がした。

(さて、どうしようか?)

リビングに戻つて首を回すと、和室の押入れが目に留まった。

和室とリビングは本来襖で仕切られるが、息子を遊ばせるのに丁度よいので襖を取り払い使つている。

眠る俺の身体の横を通り和室の一番奥に位置する押入れの襖の取っ手に指をかけ、横方向に力を加えると襖は勢いよく滑り、木枠にぶつかってパーン！と小気味よい音を立てた。

音の大きさに思わず後ろを振り返り俺の身体の様子を窺つたが、起きる気配がないのを見て取り胸を撫で下ろして、また押入れに向き

直る。

押入れ下段の右半分を子ども「一ナーダと空けたのは妻だ。来客時には、子どものもの全てをここに仕舞い、襖を閉めてしまえばよいと、得意になつて説明してくれた。狭そうで彼女に素直に同意しきれなかつたが、自分が片づけをするわけではないので反対も出来ないまま成立したそこには、口の付いたおもちゃを片付ける棚と小さな机があり、机の上には電池式のランタンが置かれている。

ひょいと身を屈めて入ると、奥に手頃なビーズクッシュョンが隠れていたので、引っ張り出してそれに座つたらスッポリと嵌つて、天井に怪獣のシールが何枚も張つてあるのを見つけた。

（あいつ、こんなとこにシールを貼られてるなんて知らないだろくな）

何も知らずに買い物に行つている妻を思いつつ、ここから眺めるリビングはどことなく別世界のようだ。

ならばと、更に湧き上がる衝動のままに身を起こし、襖の端に指を掛けようとしたところで、小さな穴を見つけた。閃きに誘われ、そつと人差し指を差し込むとぴつたりだ。襖を動かす力加減を知らなかつた先程とは打つて変わり、ゆっくりと襖を滑らす。小さな空間を照らす光はあつという間に細くなり、最後は音もなく襖がぴたりと閉まるとき暗闇に満たされた。

幼い頃は暗がりすら怖っていたのに、今は漆黒ではないが掌すら見えない闇に、ささやかな安堵を覚える。何もかもを関係なく受け入れる闇に懐の深さを感じるよつになつたのは、大人になつた証だらうか。

（懐かしいな）

すつかりこの感覚を忘れていた。

外灯のない街角などないし、部屋の中も敢えて暗くなどしない。

就寝時すら、闇が怖いと怯える息子のために小さな常夜灯をつけているのだから、作り物とはいえ、これほどの闇など久方ぶりだ。

そつと腕を伸ばしたら指先に何か触れて、カタンと硬いものが倒れた。

手探りで倒れたランタンを探し出して点けると、ほうと吐息が漏れる。

特異な環境に自然と緊張した身体がついた安堵の息だ。だからランタンが要るのか。

どうしてこんなものを置いているのか不思議だったが、我が身を置いてみれば自明の理。

(子どもはいいなあ)

愚痴でも揶揄でもなく、湧き上るのは純然たる羨望だ。

有限の世界で無限に生きる能力に、子どもほど長けたものはいいだらう。

けれど既に大人の自分がいつまでもいてよい場所ではない。

後ろ髪を引かれるが、ランタンを翳して人差し指の穴を探り出しそつと襖を開けると、途端にランタンの輝きは鈍磨し色褪せる。

スイッチを切ったランタンを元ある場所に戻し、自分も元の場所に戻った。流石に重い手を自分の腹に乗せる気にはならないので、太い腕を足で蹴るように押して脇の下にスペースを作り、暫くじやごそして收まりのよいポジションに落ち着いた。

(じつちのほうがいいな)

自分の手の重さも知らず、腹を冷やさないよつこと眠る我が子の腹に手を当て横になる習慣はもつ止めよつ。

確かに温もりに包まれ、瞼は自然と閉じていつた。

\*

「おとーさんーおきてよ

ペチペチと小さな手が頬を叩く。

小ちこに手加減をしてくれてこるのが嬉しくて、可愛くて、もう少し寝たふりをしていたら、一旦気配が離れ、腹に重い一撃が来た。

「ぐつ

衝撃の強さに涙目にならながら「おはよつ」と言つたら、仰向けて寝ている俺の腹にビンと尻を据えて得意満面の息子がおはよつと笑つた。

「おとーさん。かいじゅつ かいじて

じゅつ帳の真っ白なページを何枚かちぎつて、色鉛筆と一緒に差し出してきた。

「ああ、強いのがいいか?」

「うん。しつぽがおおきて はが とあんとあんのー がおー  
つて ビーン やるの」

「じゃあ、とつとが絵を描くから、色を塗れよ

「うんー。」

「よし、降りるー

「せーい

素直に降りて隣に座りなおす息子の横でじゅつと寝返りを打つ腹ば

いになると、息子が色鉛筆を差し出した。鉛筆を握る指に、ふと、襖裏の小さな穴を思い出す。思い出したが、すぐにでも確かめたくなつた。

「なあ、今からあそ」見せてくれないか?」

押入れを指差すと、息子が難しい顔をして考え込み始めた。

「駄目か?」

「ダメじゃないけど……おとーさん おつきーから はいれるかなあ?」

本気で悩んでいるらしく、息子の様子に、口元が緩む。

「入れるわ」

「でも あとで かいじゅう かいとよ」

「ああ、こつぱい書いてやるわ」

「やべやべだよ」

『こつぱい』と『こつ』言葉が効いたらしく、息子が勢いよくぴょんと立ち上がつた。

「ああ、約束だ」

自分も立ち上がり、息子と二人手を繋いで押入れへと歩き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7566t/>

---

うたた寝

2011年6月26日06時35分発行